

「家族の肖像」



カナディアンロッキーで家族と

ここに1枚の
写真がある。
2007年夏、カナ
ディアンロッキー
を旅した時のも
のである。

子どもがリラックスできる家に

1985年オランダ・アムステルダム。すでに赴任している夫と結婚生活の一步を踏み出した。3年ほどしか滞在しなかったが、この間私は椎間板ヘルニアの手術、流産、第一子となる娘の出産を経験した。夫のサポートなしには現地において何も乗り越えることができなかった。

96年、次の赴任地オーストラリア・シドニーへ。家族に第二子の娘、第三子の息子が加わった。渡豪前、幼稚園の卒業アルバムに下の娘は無邪気に「英語ペラペラになってきます」と書いている。上の娘も英語で話をしたいと現地でも強く思うようになり、2人とも日本人学校への入学を急ぎ取りやめ現地校に。小1と小3で転入することになった。しかし現実には甘くなく授業が全く理解できないと家でさめざめと泣く小3。1カ月間、毎日朝会の間中泣き続けた小1。1年遅れて幼稚園に通うようになった息子は毎朝脱走を企て、園では1年間自発的には一言も発することなく首を縦横に振っての意思疎通で通した。この大変だった期間、トランポリンやプールで遊ばせたり、日本のビデオを見せ

T-GAL (横浜 帰国家族の会)

芳賀恵理子

Eriko Haga

たりと、リラックスする場としての家であるようにと心がけた。こうして帰国が決まった2000年になる頃には学校の成績もぐんぐん伸び、姉弟間では英語での会話が日常となっていた。

自然に癒やされ急がず確実に

03年、今度はアメリカ・ニューヨークに赴任が決まった。高校生活が始まったばかりの上の娘が1番に賛成、中学生生活を満喫していた下の娘は難色を示し、小4の息子に至っては「心が泣く」との名言を残している。英語は得意な上の娘だったが、学校生活、特に友だちづくりには非常に苦労し、一時は心がひどく荒れ、本気で彼女のみ帰国させようかとも思った。下の娘は日本でやっていた吹奏楽やジャズダンスの継続を足がかりとして次第に自信をつけ、何事も積極的に行える娘に成長していった。息子はオーストラリア時の英語をほぼ全て忘れていたこともあり、よく体調不良を理由に学校を休んだ。登校の無理強いはず、一方でかまひ過ぎないことで家はそれほど楽しくないと思わせるように努めた。

どの赴任地でも夫には出張があった。そんな時には4人で固まって夜を過ごし、いろいろな話をした。気持ちが昂^{たか}ぶり涙を落とすこともあり、それが各々の感情を刺激し合い全員で泣く夜もあった。それぞれ何かしらのストレスを抱えてはいたが、幸いにして周りの豊かな自然に癒やされていたように思う。シドニーではベ